

## 江戸時代中、後期の住まいについての研究（第13報）

## －『匠家故実録』の分析－

跡見学園女子大学短大 村田 あが

目的： 家相文献を中心とする江戸時代の家相説に関する研究の一環として、本報告では家相文献の著者である家相相者が著した、建築儀礼についての文献の分析を通して当時の建築に関する祭事と、その際の家相相者の関わり方について明らかにする。

方法： 分析には江戸時代の寛政、享和、文化期に畿内で活躍した家相相者である松浦東鶏が著した『匠家故実録』（享和3年（1803）自序）を用いた。また、家相文献の内容との比較には、松浦東鶏、松浦琴鶴の家相文献を用いた。

結論： 『匠家故実録』は、建築工匠を対象に記された建築儀礼の教本である。斑鳩に伝わる「宮社仏閣室殿宅屋を建て営むの法」を東鶏がまとめたものであり、地鎮祭、地曳き、龍伏（いしずえ）、初鉦（ておのはじめ）、清匏（きよがんな）、立柱（はしらだて）、上棟（むねあげ）の各儀礼の式礼方法、祭神、供物、祝詞、略式礼法を説明し、祭壇の整え方を図示している。家相相者が、建築工事の節目に行われる建築儀礼にまで関わる状況が明らかであるが、家相説に関する言及は少なく、方位に関する禁忌は鬼門除けと祭神を祀る方位程度である。家相考鑑、地鎮祭、上棟祭、入居の際の祭事など、建築造営という行為に同一の宗教者が介在すること、さらにそれにより建築物に精神性、霊性が加味され、神社仏閣なら神仏の、家屋なら人の生活する場と認知される過程が明らかになった。